人と自然が共生する社会を目指して SATOYAMA イニシアティブの取り組み

SATOYAMA INITIATIVE

国連大学サステイナビリティ高等研究所
プログラム・アソシエイト
天野 陽介

国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-IAS）は、東京を拠点とする研究・教育機関です。「持続可能な社会」、「自然資本と生物多様性」、「地球環境の変化とレジリエンス」という3つのテーマのもと、政策対応型の研究と能力の育成を行っています。今回は、UNU-IASの取り組みの一つである「SATOYAMA イニシアティブ」をご紹介します。

ペルーで開催した地域ワークショップの様子

ブータンの里山の風景

地球上には様々な生態系が存在し、これらの生態系に支えられた生物が500万から3,000万種存在するといわれています。進化の過程で多様化した生物の中には、人間活動によって絶滅の危機に瀕しているものがいます。しかしその一方、里山のように長い時間をかけて人々が自然と寄り添いながらつくりあげられた環境では、人間の活動が生物の生存に欠かせません。人と自然の相互作用によって維持されている環境は、形や言葉が違えど世界中に存在し、それらを学術界では「社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ（SEPLS）」と呼んでいます。SEPLSは世界各地に存在し、生物多様性の保全や人々の暮らしの向上に大きな役割を果たしています。2008年まで国際社会では、原生的自然の保護区設定や希少生物保護などの議論が中心でしたが、二次的な自然環境にも注目し、国連大学と環境省は人と自然が共生する社会を目指す「SATOYAMA イニシアティブ」を国際社会に提唱しました。

この考え方を推進し実現していくために、2010年に愛知県名古屋市で開催された第10回生物多様性条約締約国会議の機会に、SEPLSの保全に取り組む世界中の団体が協力し合う「SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）」が設立され、国連大学サステイナビリティ高等研究所がその事務局を担っています。2010年の設立当初、51団体からスタートしたIPSIは230団体（2018年8月時点）までに成長し、多様なメンバーの連携を促すことで相乗効果を創出し、より効果的な取り組みが世界各地で実践されることが期待されています。メンバー間の協力を得て、これまでに以下のような活動を実施しています。

1. IPSI定例会合や地域ワークショップ実施

アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南アメリカなど、各地域のメンバーと事務局が共催で、それぞれ地域の特性や共通性を見出すワークショップを行いました。

2. 助成金プロジェクト

資金不足や、助成金申請の経験不足、活動に見合ったサイズの助成金がないなど、様々なメンバー団体のニーズを受けて、シード・ファンディングの助成金プロジェクトを立ち上げました。

3. SEPLSにおけるレジリエンス指標に関するツールキット作成

ワークショップ形式により、住民が自らコミュニティのレジリエンス（回復力）を評価し、議論を行うことで、地域への住民間の共通理解を高め、地域の問題解決に向けた行動を促進することを目的としてデザインされたツールキット（マニュアル）を作成しました。

4. ケーススタディ集作成

現場での活動から得た教訓や課題は、IPSIにとって貴重な財産です。これらの学びを研究機関メンバーのサポートを得ることによって学術レベルのケーススタディに仕上げ、より多くの方に読んでもらう取り組みを行っています。

▶**活動の詳細は、satoyama-initiative.org でご覧いただけます。**